

授業科目

基礎看護学演習II

| | | | | |
|-----------------------------|------|----|-------|----|
| 担当教員名 長谷川 隆雄、石塚 敏子、平野 宏美 | 対象学年 | 2 | 対象学科 | 看護 |
| | 開講時期 | 前期 | 必修・選択 | 必修 |
| | 単位数 | 1 | 時間数 | 30 |

ディプロマポリシーとの関連性

| 知識・理解 | 思考・判断 | 関心・意欲 | 態度 | 技能・表現 |
|-------|-------|-------|----|-------|
| ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ |

授業の概要

対象者の治療過程を支援するためには、科学的根拠に基づいた知識をもとに原理原則に則った確実な技術が必要となってくる。この授業では、対象者の状態を考慮して適応の判断、適切な看護技術の実施、実施後の評価について演習を通して学習する。演習では臨床現場と同じ医療器具を使用し、臨床実践能力の基礎となる看護技術の習得を目指す。さらに、臨床実践能力を高めるために、臨床事例を用いたPBLと高度シミュレータを用いたシミュレーショントレーニングを実施する。

授業の目的

1. 基礎看護学IIで学習した知識を基盤として、治療過程における基礎的な看護技術を演習を通して習得する。
2. PBLに基づいたシミュレーショントレーニングにより発展的に看護技術を応用する力を養う。

学習目標

1. 無菌操作の基本的な技術を用いて、滅菌物を取り扱う。
2. 目的や創傷部位にあった包帯法を実施する。
3. 無菌操作の原則に則り、導尿を実施する。
4. 苦痛に配慮しつつ、安全に筋肉内注射を実施する。
5. 点滴静脈内注射を実施し、適切な速度で滴下する。
6. 静脈血採血を安全に実施する。
7. 排痰ケアを効果的に実施する。
8. 酸素療法を安全に実施する。
9. 気道内吸引を安全に実施する。
10. 事例のアセスメント、看護技術の適用、経過報告を行う。

授業計画

| 回数 | 授業計画・学習の主題 | 学習方法・学習課題・備考 | 担当教員 |
|-------|-----------------|---------------------|---------|
| 1 | 無菌操作 | 演習 | 石塚 敏子 他 |
| 2 | 創傷処置・包帯法 | 演習 | 石塚 敏子 他 |
| 3・4 | 一時的導尿 | 演習 | 石塚 敏子 他 |
| 5 | 筋肉内注射 | 演習 | |
| 6・7 | 点滴静脈内注射 | 演習 | |
| 8・9 | 静脈血採血 | 演習 | 石塚 敏子 他 |
| 10 | 呼吸理学療法・ネブライザー | 演習 | |
| 11・12 | 酸素療法・気道内吸引 | 演習 | |
| 13・14 | 患者への看護技術の適応 1・2 | 演習 (PBL) | 石塚 敏子 他 |
| 15 | 患者への看護技術の適応 3 | 演習 (高度シミュレータを用いて発表) | 石塚 敏子 他 |

使用図書

| 使用図書 | 書名 | 著者名 | 発行所 | 発行年 | 価格 | その他 |
|--------|---------------------------------|---------|-----------|-------|----------|---------|
| 教科書 | 系統看護学講座 専門I 基礎看護技術II 基礎看護学 3 | 任和子 代表 | 医学書院 | 2013年 | 2,900円+税 | 1年次に購入済 |
| | 看護技術がみえる 2 臨床看護技術 | 佐藤久美ほか | メディックメディア | 2013年 | 3,600円+税 | |
| 参考書 | 看護技術の患者への適用 | 宮脇美保子編集 | メチカルフレンド | 2008年 | 1,700円+税 | |
| その他の資料 | | | | | | |

評価方法

学科試験50%
演習に基づく課題レポート20%
事例に基づく課題レポート30%

履修上の留意点

身体に侵襲性の高い看護技術について学習します。これらの看護技術を安全に提供するためには、基礎看護学IIの授業内容をしっかり理解することが大切です。演習が中心の授業です。演習では、ユニフォームを着用して身だしなみを整えて参加すること。

オフィスアワー・連絡先

授業時に確認すること